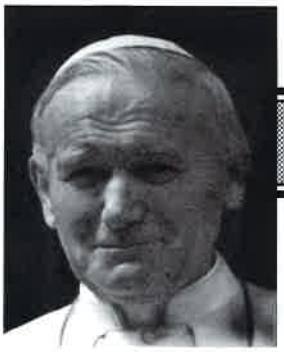
平成10年（1998年）12月10日発行　第224号　（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）



教皇様の聲 12 224号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1998

イエズス・キリストの誕生と私たち

★待降節の期間中、私たちは今や間近に迫った主のご誕生を迎える準備をしています。荘厳なクリスマスの典礼は優しさと善意の記憶を呼び覚し、家族、生命、純真さ、平和といった人間の基本的な価値に新たな注意を向けさせます。

クリスマスは家族の祭りです。伝統的なクリスマスのシンボルであるゆりかごと木を囲むと、家庭が生命と愛の聖域であることに気づきます。クリスマスは子供たちの祭りです。「クリスマスはあらゆる人間の誕生の意味も余すところなく説き明かしています。メシア誕生の喜びは、あらゆる人間がこの世に生まれ出るときの喜びの礎であり、完成なのです。」（『生命の福音』1番）同様に主の誕生も、驚きと清い心をもって生まれたばかりの救い主のゆりかごに近づく子供たちに学ぶよう、大人たちに勧めることで、純真さの価値を再発見させてくれます。

クリスマスは平和の祭りです。「まことの平和が天より下り」、「甘美を降り注ぐ」からです。（教会の祈り、クリスマスの朗読）天使の群れはベトレヘムで歌いました。「いと高き所には神に栄光、地には善意の人々に平和！」（ルカ2・14）私たちを喜びに招くこの季節、世界中のそこかしこで不幸にも大きな悲劇に見舞われている人々のことを思うと、悲しまずにいられません。彼らが心からクリスマスを祝える日は来るでしょうか？いつか人類は完全な和解を遂げた世界でクリスマスを迎えることができるでしょうか？神に感謝すべきは、いくつか希望のしるしが見え、たゆまず平和を求め続ける勇気を与えてくれていることです。（…）

クリスマスは贈り物をする祭りでもあります。大人であれ子供であれ、クリスマスの贈り物を受け取った人の喜びは想像がつきます。愛されていると感じ、処女マリアが指し示すゆりかごの中のあの子供のように、自分自身を贈り物として差し出そうと思うのです。

★けれどもこうした考察は、心を浮き立たせるクリスマスのお祭り気分を全部説明してくれるわけではありません。みな知っていることですが、信者にとってクリスマスが喜ばしいものであることの本当の理由は、御父の完全な似姿である永遠のみことばが「人」となり、弱く有限の人間に同情していたいけない幼子となってくださったという事実にあるのです。イエズスにおいて、神ご自身が私たちに近づき、共におられます。

謙遜な処女・ナザレトのマリアから神の子はお生まれになりました。ここにキリスト信者は、いと高き御方の人間に対する限りないへりくだりを見ることができます。この出来事は、キリストの死と復活と共に歴史のクライマックスとなる出来事です。

使徒パウロのフィリッピへの手紙に見られるキリストへの賛歌には、親しく人間に近づいてこられた神の秘義を前にして、初代教会が表わした感謝と驚異の念が読み取れます。「（キリストは）神と等しいことを固持しようとはせず、かえって奴隷の姿を取り、人間に似たものとなって、自分自身を無とされた。その外貌は人間のように見え、死ぬまで、十字架上に死ぬまで、自分を卑しくして従われた。」（フィリッピ2・6～8）

最初の数世紀の間に、教会は粘り強くこの秘義を種々の異端説から区別しました。いつの世にも異端説はイエズスの真の人間性やまことに神の子であったこと、神性、ペルソナの一致などを否定し、その卓抜した驚くべき内容を退け、あらゆる人にもたらされるすばらしい慰めのメッセージをおとしめようとしてきました。

「カトリック教会のカテキズム」はこう述べています。「全く類を見ない独自の出来事である神の子の托身は、イエズス・キリストが半分神で半分人間であることを意味するものではありませんし、神性と人間性が複雑に入り交じっていると言おうとしているのでもありません。キリストはまことの神でありながら、まことの人間となられました。イエズス・キリストは真の神・真の人なのです。」（464番）

★イエズス・キリストの誕生という並外れた出来事は何を意味しているのでしょう？「良い知ら

せ」は何をもたらしてくれるのでしょう？どんなゴールへ私たちを向かわせようとするのでしょう？クリスマスの福音史家聖ルカは、霊感を受けたザカリアの言葉の中で托身を神の訪れとして描いています。「主なるイスラエルの神をたたえよ。主は御自ら訪れてその民を解放し、われらのため、しもべダビドの家に力強い救いを起こされた。」（1・68～69）

しかし、人間への「神の訪れ」とは、何をもたらすのでしょう？聖書は主が介入される時、救いと喜びがもたらされること、苦難から解放されること、希望を与えられること、主の訪れを受けたなら誰であれ運命が好転し、生命と救いへの新たな見通しが開けることを証明しています。

クリスマスはひときわすばらしい「神の訪れ」です。実に、神はこの時、御独り子を通じて人間のすぐそばまでおいでになります。幼子の姿の御子は、罪人や貧しい人への慈しみを余すところなく示しています。神の養子となる恵みが、托身したみことばを通して人間の前に差し出されました。ルカは、イエズスの誕生という出来事が、どれほど人間の歴史と生活を変えたかを熱心に語ります。特に真心からイエズスを受け入れた人においておやです。エリザベト、洗礼者ヨハネ、羊飼いたち、シメオン、アンナ、そして誰よりもマリアは、訪れた神が行なわれた数々の不思議の証人です。

福音史家は特にマリアについては、私たちに会いに来られる神をお迎えするための模範として例示していますが、それだけではありません。神を受け入れた人が、今度は神の訪れと救いのための使者・道具となるよう招く、より高い希望の模範でもあるのです。「あなたのあいさつのみ声が私の耳に入ると、私の子は胎内で喜びおどりました」（ルカ1・44）とエリザベトは処女マリアに向かって叫びました。マリアは神の訪れそのものだったのです。同じ喜びが、天使の招きでベトレヘムに来た羊飼いたちにも訪れました。彼らは幼子と母親に会い、「神をあがめ、たたえながら帰って」2・20）いきました。主の訪れを受けたことを知ったからです。

私たちの間もなく祝う秘義の光に照らされて、全ての人がマリアのように開かれた真剣な心で、「上からわれらにのぞむ」（ルカ1・78）御方をお迎えし、神の喜ばしい訪れを日々の生活の中で出会う人たちに告げる道具となることができますように。　（1996・12・20）

永遠の御子は マリアからも生まれた

「聖母マリアと教会」シリーズ　20

1　救いの計画において、神は御子が処女から生まれることをお望みになりました。神のこの決定が実現するには、マリアの処女性とみことばの托身（受肉）が深く結ばれていることが必要です。「なぜ神は救いのご計画において、御子が処女から生まれることをお望みになったのでしょうか。神秘に包まれたその理由を、信仰の目で啓示全体の流れの中に見出すことができます。それはキリストその人とその贖いの使命に関わると共に、マリアが全人類のためその使命を受け入れたこととも関わっています。」（カトリック教会のカテキズム、502番）

人間の父を排除した処女懐胎によって、イエズスの父はただ一人天の御父のみであり、時の中に御子が誕生したことは永遠からの誕生を映し出していることがはっきりしました。永遠のうちに御子を誕生させた御父は、時の中に人間としても御子を誕生させられたのです。

2　お告げの場面は、神の介入の結果として御子が「人の子」となられたことを強調しています。「聖霊があなたにくだり、いと高きものの力の影があなたを覆うのです。ですから生まれる子は聖なるお方で、神の子と呼ばれます。」（ルカ1・35）

処女懐胎はマリアの協力の結果

マリアから生まれた方は、永遠からの誕生によってすでに神の御子でした。いと高きものによる処女からの誕生は、人間ではあっても神の子であることを示しています。

処女からの誕生が永遠の誕生を表わしていることは、ヨハネ福音書の冒頭でも示されています。そこでは見えない神の存在が、「御父のふところにまします御独り子の神」（1・18）のみわざと関係づけて宣言されます。人となって来られたことで「みことばは肉体となって私たちのうちに住まわれた。私たちはその栄光を見た。それは御独り子として御父から受けられた栄光であって、恩寵と心理に満ちておられた。」（1・1）

イエズスの誕生を語るに当たって、ルカとマテオは聖霊の役割についても述べています。聖霊は御子の父ではありません。イエズスの父は永遠の御父ただお一人で（ルカ1・32～35参照）、聖霊を通じて、人間性を有するみことばを世に送られます。お告げの時、天使は聖霊を「いと高きものの力」（ルカ1・35）と呼びました。これは旧約聖書とも一致しています。旧約では聖霊のことを、人間に働きかけてすばらしい行為を可

能にさせる神的な力として示しています。托身の秘義において最高度に自らを示したこの力、三位一体の神の愛であるこの力は、托身したみことばに人間性を与える役目を帯びていました。

3 とりわけ聖霊は、神の豊かさを人間に伝え、人間を神の生命にあずからせるお方です。三位一体の秘義において御父と御子をつなぐ聖霊は、イエズスを処女から生まれさせることで、人間を神と結び付けました。

托身の秘義は、マリアの処女的母性の比類なき偉大さをも強調しています。イエズスの懐胎は、マリアが愛である霊、全ての実りの源の働きに寛大に協力した結果でした。

このように、神の救いの計画の中で処女懐胎は新しい創造を告げるものです。聖霊の働きによって、新しいアダムとなる者がマリアから生まれます。「カトリック教会のカテキズム」によれば、「イエズスは聖霊によってマリアに宿りました。それはイエズスが新たな創造の始まりとなる新しいアダムだからなのです。」（504番）

信じる者には、
神の子となる力が与えられる

マリアの処女的母性の役割は、この新しい創造において、輝き出ます。キリストを「処女から最初に生まれた御方」と呼んだ聖イレネウスは、キリストの新しい生命を受けるという意味で、イエズスに続いて他の多くの者が処女から生まれることを思い起こさせます。「イエズスはマリアの一人息子ですが、マリアの霊的な母性は、イエズスが救いに来られた全ての人の上に広がっていきます。マリアが生んだ御子は、多くの兄弟たち、すなわちマリアが母の愛でその誕生と形成に協力した信者たちの長子として神が立てられた御方です。」（カトリック教会のカテキズム、501番）

4 新しい生命を伝えることは、神の子となる力を与えることです。ヨハネが福音書の冒頭で示してくれたことを思い出してください。神から生まれた御方が、信じる全ての者に神の子となる力を与えてくださるというのです。（ヨハネ1・12～13参照） 処女からの誕生は、神の父性を広げました。人間は、処女の子・御父の子である御方において、神の養子とされるのです。

このように処女からの誕生という秘義を黙想すると、神が父としての愛を惜しみなく人類に与えるために、御子に処女の母をお選びになったことが理解できるでしょう。 （1996・7・31）

主の愛に信頼しよう

（クリスマス・イブのお告げの祈り）

兄弟姉妹の皆さん。

「主はすぐそこまで来られた。主を礼拝しよう！」

待降節の間、教会はこう言いながら、クリスマスに民を訪れる神をふさわしくお迎えすることができるよう、信者たちに一層の努力を求めます。

「主が来られることを知れ。その朝、主の栄光を見るだろうから」と典礼は歌い、私たちの救いのため人となられた賛嘆すべき神の御子との出会いを、礼拝と賛美のうちに祝う準備をせよと勧めます。

待降節の間、教会は昔の預言者たちを、主を迎える準備のための模範として指し示します。そこで私たちは洗礼者ヨハネの言葉を聞き、聖ヨセフに会い、そしてエンマヌエルの母であるマリアに出会うのです。

預言者たちの言葉は私たちの希望を強めます。たとえ利己主義に負けたり、死の場面を前にたじろぐことがあったとしても、主の愛の力に信頼するよう励ましてくれるのです。洗礼者ヨハネが繰り返した招きは、主の道を備えるための真の改心への呼びかけです。偽りのない彼の証しは、生活の中に神のおいでになる場所をもうけるための具体的な方法を示してくれます。聖ヨセフの信仰と従順は、不屈の粘り強さで日々の出来事の中に神の現存のしるしを見出し、いつでも御父の永遠の救いの計画に協力する心構えを保てるようにと私たちに訴えています。

そして何よりも、待降節の典礼は呼びかけます。マリアに向かって目を上げよ。新しい「シオンの娘」、沈黙と祈りと信頼のうちに、寛大な愛のしぐさと神の御旨を果たす用意の整った心で主を待つ者の完璧な模範である御方に。

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、マリアに目を向けましょう！

教会はマリアを見つめます。マリアは喜びに震える思いでイエズスの誕生を待ち受けています。心は希望でいっぱいです。ご一緒に、繰り返しましょう。「主イエズスよ、おいでください！」と。

いつの間にか希望を萎えさせ、大きな理想から身を引かせてしまうような誘惑に直面しても、祝された処女は主に信頼するよう私たちを励ます。主の大いなる歴史の展望を受け入れ、無償で恩寵をお与えになる主のやり方に従うよう招いているのです。主の御母と共に、キリスト信者の共同体は、地上の全ての人々と民族の上に平和の恵みを願い求めます。平和の君が

来られますように！心を開いてお迎えしましょう。

クリスマス・イブに当たり、さらに熱心に祈りましょう。私たちを救いに来てくださる主の恩寵に心を開いて、人類の贖い主・キリストの誕生というお恵みを新たな喜びで迎えることができますように。

主の御母が私たちの模範となり、待ち続ける私たちを導いてくださいますように。

「皆さん、どうぞ良きクリスマスを！」

キリストは、人間とは何者かを示される

紀元二千年の大聖年に向けて準備する待降節の旅の途中に、典礼は幾人もの聖人たちの姿を示しています。今日、出会うのは洗礼者ヨハネです。厳しい人、「荒れ野に叫ぶ声」（ヨハネ１・23）、はばかりなく真理を述べたため当局の手にかかった彼は、今なお非常に今日的な存在です。ヨハネの福音は、先駆者を「光の証人」（１・６参照）として私たちに示しています。

彼が指し示した光とは、道徳上の真理だけではありません。それはキリストその人であり、ご自分を躊躇なく「私は世の光」「真理である」（ヨハネ14・６）と言い放った方です。

これは間違いなく、前代未聞の宣言でした。一見ぎょっとさせられますが、その言葉と行ない、とりわけ死と復活によって、「御父の永遠の御独り子」（ニケア・コンスタンチノープル信経）であることを示されたイエズスの口から出たからには、信頼を置くに足るものです。

多くの殉教者たちがイエズスへの信仰を証しして生命を捧げました。二千年の後、教会はなおこの真理に自らを「賭け」ています。ニケア公会議がアリウス派への返答として、永遠に私たちの信仰の象徴とした真理です。その中で私たちは、キリストを「神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神」と宣言します。

そう、キリストは光です。その神性によって御父の御顔を示してくださるからです。しかしまた、罪以外は全て私たちと同じ人間であるため、キリストは人間自身に人間を示しています。残念ながら罪のために私たちは真理の光を知り、それに従うことが難しくなっています。まさに使徒パウロが言うように「神の真理を偽りに変え」（ローマ１・25）てしまったのです。托身（受肉）によって、神のみことばは人類に完全な光をもたらしました。これについて、第二バチカン公会議は「受肉したみことばの秘義においてでなければ、人間の秘義は本当に明らかにならない」（現代世界憲章22番）と述べています。

祝された処女、キリストの母・弟子となったナザレトの謙遜な処女が、私たちの目を光に開かせてくださいますように。神である御子の秘義を前に、聖母自身も日々「信仰の旅路」（現代世界憲章58番）を歩まねばなりませんでした。心から真理を捜し求める全ての人のそばにあって、「新しい千年期に生きる人々を『全ての人を照らすまことの光』である方のもとに導いてくださるよう」（『紀元二千年の到来』59番）聖母に願いましょう。　（1996・12・15）

みことばを告げるのは私の義務

在位20周年を主に感謝して捧げられたミサでのお話

1　「人の子の来る時、地上に信仰を見い出すだろうか？」（ルカ18・８）

キリスト教が生まれてから二千年の間、かつてキリストが弟子たちになさったこの問いかけは、神の摂理によってペトロの任務を引き受けた人々にしばしば投げかけられてきました。私は今、現代の、そして遠い昔の、全ての前任者たちのことを考えています。特に私自身のこと、また1978年10月16日の出来事を考えています。今日のこの祝典で、私は20年間の教皇職を皆さんと共に主に感謝いたします。

1978年８月26日、システィナ礼拝堂で、私の前任者に対して、首席枢機卿の言葉が響き渡りました。「あなたは教皇の位を受けますか？」「受けます」とルチアーニ枢機卿は答えました。「どんな名で呼ばれたいですか？」「ヨハネ・パウロです。」それが答えでした。

「私はあなたの信仰がなくならないよう祈った。」

その時、わずか数週間後に同じ質問が私に対して発せられることを誰が想像したでしょうか。最初の問いかけに対して私は「受けます」と答えました。「主キリストへの従順のうちに、キリストの御母と教会のため身を捧げ、大きな困難は覚悟していますが、私は受け

（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）

ます。」次の問い「どんな名で呼ばれたいですか」に対しては、私も「ヨハネ・パウロです」と答えました。

復活の後、キリストは三度ペトロに尋ねます。「私を愛しているか？」（ヨハネ21・15～7参照）自分の弱さを自覚していた使徒は答えました。「主よ、あなたは全てをご存じです。私があなたを愛していることはあなたがご存じです。」そして次の命令を受けます。「私の羊を牧せよ。」（21・17）主はこの使命をペトロに託し、彼を通じてその後継者たちに託されました。主は同じ使命を、いま皆さんに話しているこの私にもお命じになったのです。兄弟たちの信仰を強める仕事を任された、その時のことです。

何度も私の思いはルカの福音書に記されたイエズスのみ言葉に戻っていきました。受難を直前にしたイエズスは、ペトロに言います。「シモン、シモン、サタンはあなたたちを麦のようにふるいにかけることができたが、私はあなたのために信仰がなくならぬようにと祈った。あなたは心を取り戻し、兄弟たちの心を固めよ。」（ルカ22・31～33）「兄弟たちの信仰を固めよ」は、こうしてペトロとその後継者たちに委ねられた牧者の奉仕の中でも最重要のものとなりました。本日の典礼の中でも、イエズスは尋ねます。「人の子の来る時、地上に信仰を見出すだろうか？」これは全ての人に発せられた問いかけですが、特にペトロの後継者に向かって訴えかけられています。

「主が来られる時、果たして…」主の訪れは、月日が過ぎるごとに近づいてきます。ミサで聖なるいけにえを祝う時、聖別のあとで私たちはいつも言います。「主の死と復活を告げ知らせよう。主が来られるまで。」

主がおいでになる時、地上に信仰を見出されるでしょうか？

2 この日曜日の典礼朗読には、主の問いかけへの二つの答えが示されています。

一つ目は聖パウロが信頼できる協力者ティモテオに送った勧めです。使徒は書いています。「私は神のみ前で、また生きている人々と死んだ人々を裁かれるキリスト・イエズスのみ前で、その現われとみ国のために、あなたに切に願う。みことばを宣教せよ。よい折りがあろうとなかろうと繰り返し論じ、反駁し、とがめ、全ての知識と寛容をもって勧めよ。」（ティモテオII 4・1～2）

この一節は、行動計画を凝縮した形で示す、貴重なものです。実に使徒の、特にペトロの役務は何よりもまず、教えを述べることです。誰であれ神の真理を伝える者は、自分自身が「忠実でなければ」なりません。使徒もティモテオにこう書き送っています。「学んで確信したところにとどまれ。」（3・14）

司教は、また教皇はなおのこと、救いに導く知恵の源に立ち戻らねばなりません。神のみ言葉を愛さねばなりません。ペトロの座について20年、いま私は自らに問いかけずにいられません。これらのことを全て守ってきたか？教会の信仰の、勤勉で注意深い教師であるか？第二バチカン公会議の偉大な成果を現代の人々に近づける努力をしてきたか？教会内の信者たちの期待に応え、また教会の外にいると感じている人々の真理への渇望に応えるよう努めてきたか？

牧者と群れは、祈りの中で支えあう

聖パウロの勧めが心に響きます。「神のみ前で、また生きている人々と死んだ人々とを裁くキリスト・イエズスのみ前で、その現われとみ国のために、切に願う。みことばを宣教せよ。」（IIティモテオ4・1～2）みことばを宣教せよ！これこそ私の務め、主が来られる時、地上に信仰を見出されるために私にできる唯一のことです。

3 もう一つの答えは、聖書の第一朗読である脱出の書の一節です。そこには丘の上で、アマレク人と戦う民を見守りつつ天に腕を差し伸べて祈るモーゼの象徴的な姿があります。モーゼの腕が上がっている間はイスラエルが優勢ですが、腕が疲れてきたとき、アロンとホルは石を運んできてモーゼを座らせ、両側に立ってその腕を支えました。こうしてモーゼは、日没になってヨシュアがアマレク人を打ち破るまで祈り続けました。（脱出17・11～13）

この情景はきわめて印象的です。それは、祈る牧者の姿です。新しいイスラエルすなわち教会が身を置いているあらゆる状況の中で、さまざまな「アマレク人」と戦わねばならない時、これ以上に適切なたとえはないでしょう。ある意味で、全てはモーゼの差し伸べられた腕にかかっているのです。

牧者の祈りは群れを支えます。それは確かです。しかしながら、民の祈りが、彼らを導く役目を帯びた者（それが誰であれ）を助けることも事実です。初めからそうだったのです。エルサレムで死刑の宣告を受けたペトロが牢につながれている時、全教会は彼のために祈り続けました。（使徒行録12・1～5参照）使徒行録は、ペトロが奇跡的に牢から解放されたと伝えています。（12・6～11）

時代を経て、同じようなことは数えきれないほど起こりました。私自身、自分の経験から証言できます。教会の祈りとはこれほどに強いのです！

4 この何年間、私への連帯を表明してくださった全ての人々に感謝したいと思います。多くのお祝いのメッセージに、感謝します。とりわけ、いつも私のために祈ってくださったことを感謝いたします。私は特別に病人と苦しむ人々のことを考えています。私のために苦しみを捧げてくれた人々です。また修道院にこもる人々、男女の修道者たち、若者たち、家庭

のことをも考えています。常に私と私の普遍の役務のため、一つの声で主に祈り続けてくれる人々です。この数日間、私は教会の心臓がすぐ身近に脈打っていることを感じています！（…）

ローマの、イタリアの、そして全世界の親愛なる兄弟姉妹の皆さん。いま私たちが祈りながら聖ペトロ広場に集まっているのは、神に感謝を捧げるためです。歴史を旅するご自分の民を、神はみ摂理によって絶えず支えてくださいます。また私にとっては、20年前に答えた「はい」という返事を、神の恩寵に信頼して新たにするためでもあります。そして皆さんは、いつもこの教皇のため、教皇が使命を果たすことができるようお祈りしてください。

もう一度、心から私の生命と使命を聖マリアに、贖い主の御母・教会の御母に委ねます。御身に、子として全てを委ねます。

Totus tuus!

（1998・10・18）

教皇さまの動き

●11・10　第45回イタリア司教会議への教皇メッセージが発表された。教皇さまは、諸問題に対処するイタリアの聖職者たちが「委ねられた使命をあきらめることなく、順応主義や一時の流行に屈することなく、信仰と文化と個人及び社会生活を別々のものと見る誤った考え方に抵抗するよう」励まされた。

●11・11　恒例の聖ペトロ広場での一般謁見で。大雨の中、今回のカテケージスのテーマは「聖霊…消えない希望」であった。「人類の行く手には多くの危険が待ち受け、多くの疑念がのしかかっているようで、時には立ち向かうこともできないかのように思えます…イエズス・キリストからの希望のメッセージは、疑いと悲観に満ちた地平線に光を投げかけます。希望は信仰の良い戦いを生き抜く私たちを支え、守ってくれます。希望は祈り、特に、希望によって私たちが願うすべてのものを網羅した＜天にます＞の祈りにはぐくまれます。」

●11・12　教皇庁立大学にて、13番目の回勅『Fides et Ratio』の公布式を司式される。「思考することで、人は自らの限界を越えて無限へと近づきます。しかし人が無限に向かって開かれれば開かれるほど、自らの限界に気づくものです。」「不服従は独立独歩への意志の現われですが、いつしか行動を狭めるものとなり、神に近づく障害となる危険があります。哲学研究の分野においても然りです。」「哲学と神学の対話を再開させることが急務です。これが実現すれば、双方にとって有意義です。知識が細分化されている中で、神学にとって重要なのはさまざまな探求の道をつなぐ基本的な一致とは何かを探し出すことです。」「真理とは神から贈られる自由な賜物に他ならず、自由に受け入れるべきものです。歴史が示すように、天からの真理は理性をくつがえすものではなく、人類の真の進歩につながるものなのです。」

●11・13　朝、教皇さまは「ヨハネ・パウロ2世治下の教皇庁外交20年」をテーマとしたセミナー参加者をお迎えになった。「教皇庁の外交には、全世界で人間の尊厳とあらゆる形での人類共存を促進し、広め、守ること以外の目的はありません。この共存という言葉には、家庭に始まり、職場や学校、地域、国家、そして国際共同体まで含まれます。」「貧しい人々の声を、分かち合いと連帯を求める基本的訴えとして全ての人に聞かせるために、教会は声を大にして伝える義務があります。…外交は、人間を中心に据え、個々の人間と諸民族の尊厳を認める倫理的原則に基づかねばなりません。」

●11・15　ローマ市内の教会でミサを立てた教皇さまは、人生の最終地点で待ち受けることについて考えるよう、お勧めになった。「信者はキリストとの出会いを念頭にして生きるよう呼ばれています。個人的努力で、日々少しずつでも神の国を招き寄せるよう絶えず努めるべきなのです。」　ローマ市内での福音宣教に言及した教皇さまは、11月29日から紀元二千年の大聖年準備の第三年目が始まることを宣言された。「人々の生活と仕事のあらゆる局面で福音を宣言するため、宣教者たちを送ります。」「キリストの死と復活に余すところなく示された父なる神の愛を宣言するのに、時や場所の限界はありません。福音の宣教が教区のすみずみまで響き渡りますように。福音は全ての人のための救いのメッセージなのですから、いつでも、どこででも述べ伝えられなければなりません。」

「教皇様の聲」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙
■毎月10日発行　■定価：送料とも一部186円　■年内定期購読：送料とも一部2,087円
詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会　〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448